

| | | |
|-----------------------------------|---------------|---|
| <p>日本子ども 支援学会 ニュースレター</p> | <h1>風の便り</h1> | <p>2022年7月 臨時増刊号2</p> <p style="text-align: right;">目次へ </p> |
|-----------------------------------|---------------|---|

ウガンダ通信 2

宮本宗一郎(在ウガンダ・Kitgum)

Q;宮本様:「7月臨時増刊号」のウガンダ通信をありがとうございました。宮本様は、ウガンダの子どもたちと、何の言語にてコミュニケーションをとっておられるのでしょうか。また、宮本様ご夫妻が日本人ということで、日本語を学びたいというような子どもさんはいるのでしょうか。次のレターでは、お教えいただけるとありがたく思います。

(国語教育に関心を持つ会員より)

A :ウガンダの面積は、日本の北海道を除いた面積とほぼ同じです。そのウガンダ国土に50近い部族がいます。

そして、それぞれの部族は「話し言葉」を持っておりませんが、文字はありません。例えば、私達が活動している北部の部族はアチョリ人、首都カンパラ周辺の部族はブガンダ人です。しかし、日本の「ありがとう」という言葉は、前者は「アポヨ マツテク」、後者は「レバ レンニョ」と発音しますので、全く違います。他の部族間も同様です。こうした状況が何千年以上も続きましたが、19世紀後半にイギリス人がウガンダなどアフリカの国を植民地にした時に、英語という「文字」が導入されました。他の地域では、フランスやベルギーの植民地ではフランス語という文字が導入されました。

現在、ウガンダでは、英語が国語(共通語)になっております。そのため、英語を話せるか否かがその子供の将来を左右します。小作人のままで生涯を終えるか、未来が開けるかを決定します。学校では、英語で授業が行われます(3年生までは部族語も一部使って説明をしているようですが、4年生以上になるとすべて英語で授業しています)。子どもたちは家では部族語を使用しますので、学校に行かなければ、英語を学ぶことができません。多くの貧しい子供たちが学校にいけない事情については、2021年3月号の「風の便り」の私の拙いレポートを参考にしてください。そこで、私達は貧しいウガンダの子供たちへの教育支援活動を細々と行っております。子どもたちの心の中に希望の種を植えているつもりですが、どれだけ効果があるのか分かりません。

新しく完成した図書館などで、時々開催する支援中の子どもや保護者とのミーティングでは、私達が英語で必要なことを話し、それを現地のスタッフ(英語が話せるアチョリ人)がアチョリ語で通訳します。きちんと必要なことを正しく通訳しているかどうか不安ですが、仕方ありません。

部族語には文字がありませんので、辞書も本もありません。私達は部族語を学ぶことは不可能です。あいさつ程度は耳できいて使っている程度です。本当は部族語を話した方が身近になり、良いのですが……。残念です。ウガンダ国内にいるときには私達は英語のみ使用しています。

また、イギリスなど欧州は身近に感じています。日本は遠い国というイメージを多くのウガンダ人は持っています。例えば、子どもに日本のことを地球儀を使って話した後、感想を聞くと、「日本はケニアの隣の国ですか」と質問される始末です。また、ウガンダの大人の人も、「日本は中国の一部」と思っている人が多いです。ですから、私達の身近な人の中で、日本語を学びたいという人はほとんどいません(ただし、私達の調査が足りないのかもしれませんが)。ケニアでは、日本語の教室を開催している人がいるという話は聞いたことがあります。

以上、お答えになっているかどうか分かりませんがよろしくお願いいたします。

日本は猛暑と聞きました。どうぞ、ご自愛なさってお過ごしください。

ご健勝をお祈りいたします。(了)